

## 「日本陸軍の終戦」

やまもとともゆき  
山本智之

### 【はじめに】日本陸軍のイメージと歴史学

- ・徹底抗戦派と思われてきた陸軍→「徹底抗戦派＝陸軍を抑える」対立図式→戦後「悪者」陸軍のイメージが一般国民にも広く浸透
- ・歴史とイメージ→時代とともに変化(社会・生活環境の変化・世代交代(価値観の変化)など)→当然、陸軍のイメージにも変化が伴う→近年、若手研究者によって終戦史研究が進む→陸軍研究にも「新たな光」
- ・終戦史研究→史料不足→「史料の発掘」よりも「解釈をかえる」ことに重点がおかれる
- ・陸軍早期講和派の存在→陸軍のイメージが変わる→世代交代(価値観の変化)が大きく影響

### 1・陸軍による終戦研究開始

- ・まつたにまさい松谷誠陸軍大佐(英米通軍人)の参謀本部戦争指導課長就任(1943・3)→終戦研究開始
- ・強大な権限をもった参謀本部作戦課→作戦至上主義の陸軍にあつて「最強」の部署
- ・一面对決一面依存(共存)→対立もするが共存もする→ゆるやかな対立路線(敗北感の違い)

### 2・部内外連携(戦争指導課のとった道)

- ・「部内工作」と「部外工作」→(終戦の)合意形成を勝ちとる方法→戦争指導課の任務
- ・主戦派「包囲網」と憲兵対策

### 3・早期講和の進言

- ・松谷大佐の進言(1944・6・29)→東条英機参謀総長激怒→松谷大佐転任→組織と終戦工作
- ・松谷大佐の中央復帰(1944・11)→主戦派の沈滞→息を吹き返した松谷ら早期講和派

### 4・終戦(1945・8)

- ・終戦時の陸軍の強硬な態度→陸軍が悪く印象づけられた
- ・組織によって違う敗北感→情報収集・分析・情勢判断の体制が各組織バラバラ(情報の共有ができない)→(終戦の)合意形成に時間がかかる→陸軍が最も敗北感を感じていない

### 5・戦後における旧陸軍の影響

- ・陸軍が戦争責任のすべてをおう→「聖断」効果をあげる→天皇制の安定化に貢献
- ・民主化された天皇制→柔軟性が存続のカギ(「国体」から「天皇制民主主義」へ)
- ・近年の陸軍の再検討→組織の一部分強調の恐さ→時代の変化→歴史に決定版はない

### 【おわりに(終戦移行を実現させた陸軍の体質)】

- ・少しずつ終戦移行への土台を築く→「事前準備」・「用意周到」の徹底→戦況(状況)の変化に対応できる柔軟性(勝つ、引き分け(る)、負ける場合の想定)→敗戦を考慮する→非戦
- ・組織内によくある共存(依存)と対立の二面性→共存(依存)面と対立面を巧妙に操作する
- ・「負けて勝つ」→「100年かかっても回復できないような負け方は駄目」→敗戦復興平和